



Q 先日、祖母の三十三回忌でした。お寺さんに、切った習字紙をお供えしたいと申し出たら、「これは使わないでください」と叱られました。私のミスだと反省しています。あらためて、祖母やお寺さんに謝罪するにはどうしたらいいのでしょうか？

(N市・Oさん)

A えっ？ Oさんのミスではないと思いますよ。この切った習字紙というのは、多分、シルカビのことをおっしゃっているのだと思います。漢字では、シルカビ＝白紙と書きます。沖縄では、半紙・習字紙ともいい、地域や家庭によって、素材をそのまま名称として用いることもありえます。まず、シルカビをお供えしたいと申し出たOさん、ウチナーの素養(そよう・基本的な教養のこと)をしっかりと身に付けられていて、とても立派だと思います。

ではここで、あらためて沖縄の祭具であるシルカビについて、確認しておきましょう。シルカビには、先述の書道用紙(半紙・習字紙)を用います。これは、白色の紙が、神社の注連縄(しめなわ)で使用されている紙垂(しで)に類似しているからだという説があります。「A4のコピー用紙を代用しても大丈夫ですか？」というご質問をいただいたことがありますが、たしかに、白い紙には間違いないでしょうが、やはり、一般的な書道用紙の方がいいかなと思います……。

さて、この紙垂ですが、神社へ初詣などに行かれたとき、正面の大きな縄に垂らされている、白色のヒラヒラした紙とても申しましようか？それが紙垂です。大相撲の横綱も、その綱に紙垂を使用していますよね。紙垂には、しで＝垂(し)づ＝しだれる、という意味があります。古い言い伝えには、落雷があると稲・米が豊作になったそうで、雷がしだれる(落ちる)稲妻をイメージしているのが、この紙垂だとの考え方があります。なるほど、だから紙垂は、白色の紙を稲妻のようにギザギザと切るのですね。その稲妻の力強さから、紙垂はマジン(魔物)などを追い払うとの考え方があります(あくまでも、諸説の中の説です)。そこから拡大解釈しますと、シルカビも、沖縄でいう魔除けを意味しているのでしょうか。

シルカビの多くは、書道用紙を切ってお供えます。一般的には、1枚の書道用紙を四分分します。そのうちの3枚を1組として、重ねて使用する人が多いようです。地域家庭によっては、ヒラウコー(平御香)のチュヒラ(平・ひとひら)が6本であることから、六等分したり、干支の十二支にちなみ十二等分する作法もあります。この作法が異なる点こそ、年中行事などを畏敬する、沖縄の沖繩たる素晴らしい所以ではないかと、微笑ましく拝見させていた

だいています。シルカビの作法には、色々なご意見があります。例え

ば、畏敬する対象に対して、刃物を向けないという意味合いからハサミやナイフなどを使用せず、丁寧に爪で折り目をつけて、両手でゆつくりと破りなさいとか、シルカビの表裏を使い分けて、喜びや悲しみを表現するというケースなど。どの考え方も、それぞれに一理あるものです。ちなみに、四分分などしたシルカビ、3枚を1組、重ねて使用すると申し上げましたが、地域・家庭によっては、3枚を3組、重ねて使用されることもあります。三十三回忌では、ウティンジカビ(御天地神)・ウモーシカビ(御申神)という、赤色・紫色・黄色・白色の特別なカビ(紙)をお供えすることがあります

が、その代用としてのシルカビを使用する例を多く見受けました。今回、Oさんのミスではないと申し上げた理由も、ここにあります。一方、お寺さまの言い分にも一理あります。実は、シルカビなどの魔除けを使用されない宗教・宗派もあるからです。仏式の場合、尊い読経(どきょう)と法話(ほうわ)がありますので、魔除けを使用しなくとも、厳肅な三十三回忌のお勤めができるということでしょう。そのお寺さまへの、あらためての謝罪は必要ないと思

います。私も一応、お寺様ですが、そのような些細なこととは、気にもされていないと思います。また、三十三回忌のおばあちゃんにも、特別な謝罪は必要ないでしょう。というより、「孫が頑張ってくれているねー」とお喜びになられているのではないのでしょうか？

今回のご相談、謝罪という言葉を目にしただけで、Oさんのお人柄が伝わってまいります。謝罪の謝とは、言(ごんべん)＝気持ちを伝える、射(しゃ)＝弓を射ると解析できます。そのことから、自分の気持ちを相手に伝える、という意味があるのだとか。そこから、返礼という意味が出てきたのだそうです。その気持ちは、同じ謝の文字を使用する感謝の気持ちにつながると思います。Oさん、おばあちゃんにもお寺さまにも、尊い感謝の気持ちに出会えた、素晴らしい三十三回忌になりましたね。

シルカビの作法には、色々なご意見があります。例え

